

## 循環ワーカー養成講座「循環型社会と原子力発電」第1回 『われわれはなぜ脱原発をめざすのか』

講師：山口 幸夫 氏（認定NPO法人 原子力資料情報室 共同代表）

日時：2010年6月23日（水）18：30～20：30

場所：ノルドスペース セミナールーム（東京都中央区京橋 1-9-10 フォレストタワー）

### 1. 循環型社会のイメージ

きょうお話したいことは大きく3つあります。まず私自身の「循環型社会」イメージについてお話をしたいと思います。次に、そのように考えるに至ったいくつかの事由をお話したいと思います。そして3つ目に、やはり「脱原発」でいくしかないんじゃないかという話をしたいと思います。

ある時期までは私も循環型社会など考えてもみませんでした。新潟県の信濃川のほとりで生まれて育ちましたが、大学の学部が終わる頃までは、科学がわかれば、世界のすべてがわかるという想いでいました。

私が生まれたのは柏崎刈羽から直線距離で30kmくらいのところで、原発で大事故が起きればもろに影響のある、雪の深い片田舎です。そんなところで高校をおえて東京大学の駒場寮に入りました。寮委員の名前の中に亀井静香というのがありました。なぜ男子寮に女子の名前があるのか不思議に思いましたが、後に政治家になった亀井静香でした。彼は私の1年上で、酒を飲んであばれまわる、はなはだ迷惑な人間でした（笑い）。1年後に入って来たのが高木仁三郎さんでした。彼はその頃から、寄らば斬るぞというような独特な雰囲気をもっていました。

循環型社会を考えざるを得なくなった契機が2つありました。

1つは60年安保です。今年で50年になります。ちょうど私が大学院の修士1年のときでした。私は応用物理学科の物理工学コースで、コースがもう2つありました。計測工学、数理工学のコースです。鳩山由紀夫さん、共産党の志位和夫さん、経済学者の野口悠紀雄さんも応用物理学科の、それぞれ数理、物理、物理コースの出身です。60年安保の時に、連日教室会議やデモなどが行われていましたが、その教室会議では日ごろ尊敬していた偉い先生方は何もおっしゃらない、黙ってばかりでした。授業や研究を続けるのか、さし当たってやめて、この政治状況を考えるのか、大学院生は非常に活発に発言しているのに、先生方は何もおっしゃらないんです。これは、おかしいなと思いました。

それから物性物理の研究を続け、できたての物性研究所で学位を取った後、アメリカに



渡りました。その2年目の終りくらいに日本で大変なことが起こりました。

1966年に半導体物理の国際会議が京都で開かれましたが、そこにアメリカ軍がお金を出した。当時の日本物理学会のボス教授たちは、ほとんど疑うことなく受け入れたんです。軍と共同の研究をしてよいのかと若手物理学者たちから反対意見が出て、かなりもめました。日本物理学会は大揺れに揺れました。

67年の夏から秋にかけて、物理学会の全会員にアンケートで、4つの決議について賛否がとられました。私はそれをアメリカで受け取りました。ひとつは、米軍から金をもらったのは間違いだった。2つ目は、半導体物理の国際会議実行委員会は過ちを犯した。3つ目は軍との共同研究は物理学会としては今後一切やらない。4つ目は、当事者はしかるべき責任を取るべきだということです。

そうした中で、60年安保まで神様のように尊敬していた先生方が、若手の追及にあってしどろもどろになり、論理も破綻してしまった。例えば小谷正雄という私自身も彼の本を読んで勉強したえらい先生が実にみじめな状態でした。高橋秀俊という高名な物理学者でパラメトロンを発明者も、まったく子どものような反応でした。

それ以来、大学の先生はだめだなどと思ってしまいました。大学の先生を尊敬する気がなくなっていました。要するに専門馬鹿に過ぎないのではないか、その人達の学問の中身は何なのかを深刻に自分自身に問わざるを得なくなりました。高木仁三郎さんとの関係もその頃から深くなりました。

私は循環型社会の基本は、平和で持続的なエネルギーに基づかなければならないと思っています。ここで資料にある「循環」について書いた私の文章を読ませていただきます。最近この箇所が高校や大学の試験に引用されて、本人も驚いています。

「春、咲きにおう桜はやがて散って葉桜になる。秋には紅葉し、冬は枯れ木のようになるけれど、春がめぐって来れば再び見事な花を見せてくれるでしょう。ただし、自然の環境がこわされずに保たれているかぎりは、です。動物も植物も個体としては死にますが、腐敗し、発酵し、大地にかえり、大地の養分となり、豊かな土壌を生みます。その土壌で草や野菜や樹木が育ち、鳥や獣が木の実を食べ、それらの動植物の生命をヒトがいただいて、ヒトが生きていけるのです。多種多様な生きものが存在することなしには、ヒトが生きることはできません。

「森は海の恋人、川はその仲人」と言った人がいます。川口でカキを育てている畠山重篤さんという漁師ですが、上流に広葉樹の森が広がっていないと、川に栄養分がなくなると、魚もカキも育たないことを実感し、山に木を植えています。江戸時代の日本人はこういうことを知っていて、魚付き林と呼んでいました。

サケという魚も自然の循環の中で生きています。海に流れ出た森の栄養分を体内に取り込み、川を遡ってきて産卵して死ぬ。動物や鳥がそれを食べ、あるいは上流の土地を肥やし、それが森を豊かにする。まさに循環です。

ニワトリが先かタマゴが先か、よく論じられますね。これは、どちらが先ということとは

ないのです。ぐるぐると廻っている循環の過程の、目立つ二点を、ニワトリと言っているのはタマゴと表現しているだけなのですから…。この循環が成り立っているかぎりは、ニワトリという種は存続できるわけです。

開発のために森林を伐採した結果、イヌワシが巣づくりできなくなった、と報道されたことがあります。工業化社会をそんなふうに進めていくと、イヌワシは卵を育てられなくなって、滅びていくでしょう。

農薬を使い続けていくうちに、田んぼにドジョウもつづ貝もいなくなって、それらを餌にしていたトキが減りました。メダカが姿を消しつつあります。

くり返し、くり返し、同じ状態がめぐるってこと。これが循環です。それを断ち切ってしまうこと。地球史上、そのことが現代ほど重要になったことはありませんでした。

里山の大切さが最近では強調されます。集落に接した雑木林のある地域を里山というのですが、ここを伐採してしまったらどうなるのでしょうか。昆虫や鳥や小動物が棲めなくなります。キノコや山菜、木の実もとれなくなります。雑木林がもっていた洪水調節のはたらきも失われ、水源の涵養も果たせなくなるでしょう。下枝をおろして薪にしたり、下草を刈って堆肥にすることも、できなくなります。

生命は自然の循環と共にあった。これは疑いえない事実ですね。自然は実に多種多様でした。石油や石炭がなくとも、自然を上手に工夫すれば、エネルギーを取り出すこともできます。バイオマス（＝生物資源）とか自然エネルギーという言葉を目にしたことがあるでしょう。

いままでの科学技術はそれを考えてきませんでした。二十一世紀を生きるあなたは、新しい視点で、これまでかえりみられなかった科学や技術に取り組むことが可能です。ひとことで言うと、循環を断ち切らないシステムをつくる、そういう科学や技術です。」

これが、私が抱いている循環型社会のイメージです。

私が循環型社会を考えざるを得なかった契機のもうひとつは三里塚闘争です。成田空港建設に反対する百姓や全国の人たちの闘争に私も成り行きで深くかかわりました。そこで農業や農について深く考える機会を得ました。いまは亡き福岡正信さんという人の自然農法というのは非常に魅力的なものです。日本ではあまり知られていませんが、植物の共生を徹底して追求した人でした。「雑草なんか」といういい方はせずに、いろいろな植物が畑、大地に根ざしている。それでいいんだという考え方です。粘土団子（ねんどだんご）という、いろいろな作物の種を粘土、堆肥と混ぜて団子にして撒いておけばいいというんです。『自然農法—緑の哲学の理論と実践』（時事通信社、1976年）という本もあります。生物多様性を植物の面について追求した農法だと思います。

三里塚闘争で出会った百姓たちは、慣行農法、つまり化学肥料や農薬を使う農法だと土が死んでいくと感じて、微生物を使った農法を考え出しました。「三里塚微生物農法の会」といいます。共同でバウムフードという醗酵微生物菌と牛糞、鶏糞、ぬか、おがくずなど

を混ぜ堆肥づくりをやっています。そこでできた野菜をワンパックにして都会の消費者に送るということを始めました。消費者のほうは、スーパーとは違う泥つきの野菜をひとつひとつ料理して食べなければならないので大変です。学生や独身男性なんかだと難しいでしょうが、私のところでは、なんとか条件が整っているので続けています。そのワンパック野菜を続けているときに、ある消費者からバイムフードや鶏糞などが身体に合わなくて、ジンマシンが出たり、野菜についている臭いでとても食べられないという声が上がりました。それで、小泉英政・美代夫妻というワンパックを創始した生産者が、バイムフードや鶏糞を使わないで、落ち葉だけの堆肥で野菜づくりをやりだしました。「小泉循環農場」といいます。うちは、両方から野菜を購入してくらしています。

いのちのつながりを断ち切らないような科学や技術が必要だろうと思います。1962年にレイチェルカーソンの『沈黙の春』という本が出て、すぐ翌年に「生と死の妙薬」という青樹築一さんによる翻訳が出ています。それはDDTなど化学物質が微生物や小動物、やがて人間にも害を与えるということを警告したものでした。

化学は学会誌が「化学と工業」という名前で、工業とは切っても切れない関係にあるということを示しています。化学をやった高木仁三郎さんもそのことを気にしていच्छやいました。

完全無農薬の有機農法野菜で、一番すぐれているのは小泉さんの循環農法による野菜だと思います。すくなくとも、虫を殺さない、土を殺さない農法で作られていること。未来を考えていくと、そういうものと一緒に生きていくのが正しいだろうと思います。

## 2.わたしたちの文明観

自然には生命系と物質系があり、当然重なっているところもあります。その関係について近代の考え方は、物質系を人間のために利用するというものでした。ですから、物質資源という言葉が当然出てきます。資源というのは人間の都合のよいように、物質を採取して利用するためのものという考えかたです。

長い間私たちは、大量生産・大量消費・大量廃棄のサイクルがうまく回っていることが必要だと考えていました。よその国から鉱物やエネルギー資源を持ってきて大量に生産する、生産物を大量に消費すると、必ず大量廃棄になり、物のごみや、熱のごみ、騒音などが出てくるという考えかたでした。しかし、その考えは少し浅かったようで、白鳥紀一さんと中山正敏さんの『環境理解のための熱物理学』（朝倉書店、1995）という本には、採取、精製・加工、使用、廃棄、それぞれのプロセスについても資源・エネルギーが投入され、それぞれのプロセスから廃棄物・廃棄エネルギーが出てくるという考えかたが紹介されています。

私たちは生産のために資源を使うわけですが、環境ということが視野に入ったのは、それほど古いことではありません。日本では、足尾銅毒事件あたりが、環境問題が明らかになった最初だと思います。そのことをずっと忘れてしまっていて、1956年、ちょうど私が

大学に入った年ですが水俣病が問題になり、工業社会の高度成長の裏側の問題として、ワンセットで事態が進行していきます。今年は、60年安保の年から数えて50年になりますが、「いのち」の問題が、60年代から軽んじられるようになってきたのではないかと思います。

夏目漱石の『行人』という、近代知識人の悩みを描いた小説の中で、漱石は主人公の長野一郎にこんなことを言わせています。

「人間の不安は科学の発展から来る。進んで止まることを知らない科学は、かつてわれわれに止まることを許して呉れたことがない。徒歩から俵、俵から馬車、馬車から汽車、汽車から自動車、それから航空船、それから飛行機と、どこまでも休ませて呉れない。何処まで伴われていかれるかわからない。実に恐ろしい。」

この作品は、ライト兄弟の飛行機の発明（1903年）から10年も経たないうちに書かれたものです。私はこれを読んだとき、すっかり考え込んだのを覚えています、

現代はなんでも速く仕上げるのが良いこととされているけれど、そのときの熱エネルギー消費はどうなっているのでしょうか。カルノーの研究によれば「捨て熱」は避けることができない。それは環境に捨てられる。いまの日本の家庭では、使うエネルギーの3分の2は熱の形です。快適で便利な暮らしの背後で、エネルギーと環境はどうなってゆくのだろう。漱石の作品に触発されて、その頃の私はそんなことを考えました。

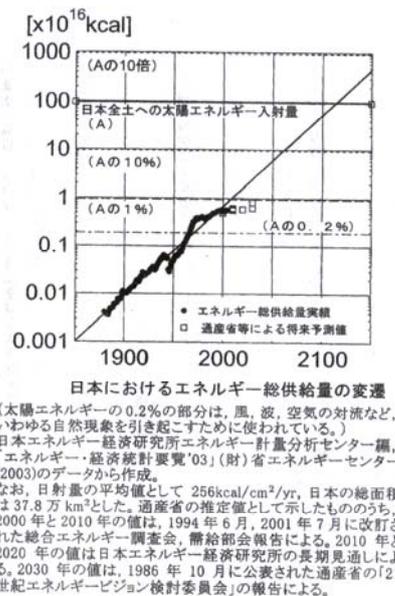
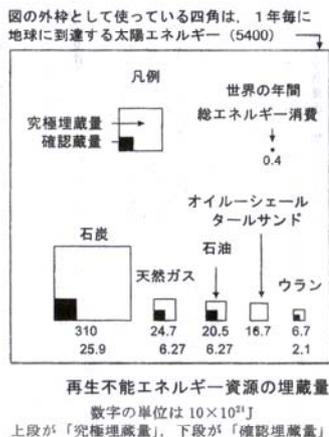
みなさんをご自宅で月にどれくらいの電力を使っているかご存知でしょうか。私は、平均的な3~4人家族の家庭であれば月に250kWhで済むと思っています。

電気は非常に便利で、クリーンなものと言われまして、電気をつくる方法はいろいろありますね。騙されやすいのですが、最近の広告に、刑事ドラマによく登場する俳優さんと女優さんが、「電気はごみを出しますよ」というのがあります。それは原子力発電から出てくる高レベル放射性廃棄物のことなんですが、それを安定的な地層に埋めて、将来の子どもたちに迷惑をかけないようにしようというわけです。原子力発電を推進する人たちの言い分ですね。

家庭で使うエネルギーの3分の2が熱エネルギーなら、太陽エネルギーから直接エネルギーをもらおうということで、わが家では屋根にパイプを並べています。そのパイプに水を通して太陽光で暖め、お風呂におとして使っています。お風呂におとしたときの温度を1990年の4月から1991年の4月まで1年間測ってグラフにしてみました。水道水の温度も同時に測ってみました。1月の半ばから4月の始めにかけてはお風呂に適温の42℃を少し下回ってしまうので、ガス釜で追い焚きしましたが、それ以外はガスを使うことなくお日さまのお風呂に入ることができます。

太陽エネルギーは無限だと思っていいいし、循環型エネルギーと呼んでもいいと思います。

「再生不能エネルギー資源の埋蔵量」の図は小出裕章さんの書いた教科書にある図ですが、外側の白い四角が究極埋蔵量、黒い四角が確認埋蔵量を示しています。これを見ると石油などは早晩なくなりますが、太陽光エネルギーは無限と言っていいいでしょう。



「日本におけるエネルギー総供給量の変遷」の図も小出さんが整理されたもので、横軸が西暦年、縦軸が対数軸になっていますが、日本における総エネルギー供給量が年々増えてきています。しかし、まだ日本の全土への太陽エネルギー入射量の1%に達していないということを示しています。これを見ますと、私たちはやはり太陽エネルギーをうまく使っていくしかないと思います。

私たちは「能率」という概念と「効率」という概念を持っていますが、しばしば混同していると思います。どれだけ時間が短縮できるかが「能率」という概念です。エネルギーをどれだけ節約できるかが「効率」という概念です。「能率」は仕事÷時間でジュール毎秒という単位になります。しかし「効率」は仕事量÷投入エネルギーで、分子ともエネルギーですから、エネルギー÷エネルギーで、ディメンションのない単なる比の値になるわけです。この値は必ず1より小さくなります。

こういう研究は19世紀のフランスの工学者というか、物理学者のサディ・カルノーという人がしていて、そこからエントロピーという概念も生まれてきました。

### 3. 「平和のための原子力」だろうか

私が1960年の3月に学部を出て、4月に大学院に入り、6月に安保闘争という頃には、まだ東京大学に原子力工学という学科はありませんでした。大学院の博士課程の1年の途中で原子力工学科ができました。理科I類の成績の優秀な学生がそこに殺到しました。物理工学コースには、若手のまさにこれから原子力をやろうとしている先生が講義をしにきて「諸君、これから夢のエネルギー源の話をしてします」と言ってウランペレットを見せ、「これ1個で家庭の1年分のエネルギーをつくることのできる。ぜひ野心ある君たちは原子力の世界に来たまえ」と誘っていました。そして野心ある若い人たちが原子力の世界に行くということが起こりました。

私は大学院に入る前の年、広島と長崎の原爆資料館を見ていました。また、田舎の小学校でしたが、新藤兼人が製作した「原爆の子」や永井隆を描いた「長崎の鐘」、そして「きけわだつみのこえ」などの映画を見せられていました。子ども心に戦争はいけないんだと強く思うようになっていて、原子力には手をつけてはいけないだろうと思って、先生の勧誘にはのらず、物性物理のほうに行きました。

資料に『新版 20 世紀理科年表』（岩波、1998 年）からの引用が載っています。1940 年に原子爆弾の可能性が示唆され、1942 年にマンハッタン計画、1945 年に広島、長崎、そして 1954 年にビキニの水爆実験と続きます。そこに「ビキニ被爆の翌日、原子力予算 2 億 3000 万円、突如として中曽根康弘議員（のちの首相）が国会へ提出した。ヒロシマ・ナガサキにこだわっていた日本の科学者が慎重な態度で議論していたのではちががあかないと見た中曽根は「学者がぐずぐずしているから、札束でほったをひっぱたくのだ」と語ったと伝えられる。」という武谷三男編『原子力発電』（岩波新書、1976 年）からの引用があります。中曽根さんはそんなことは言った覚えがないと否定したようですが、現実には当時、とても少なかった研究予算がどんと増えてびっくりした覚えがあります。

1955 年にはバートランド・ラッセルとアインシュタインが共同声明を出しています。私は田舎の高校の 2 年生で物理や化学にはまっていた頃でした。水爆実験に対して警告を発したわけです。アイゼンハワー大統領が「平和のための原子力」という大演説を国連総会でして、それを契機として日本も世界各国も原子力発電の研究に取り組みだしました。

ほとんどの学者たちは、研究費がたくさんくるということに引かれて参加したと思います。

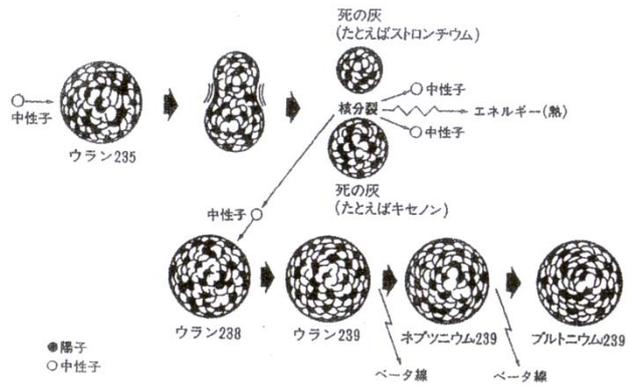
岩波書店の「科学」09 年 11 月号に私は短い文章を書きました。政権交代で鳩山政権に希望をもった編集者の求めに応じたもので、「原子力政策 転換のとき」というタイトルです。時代は変わりつつあるという認識です。読んでみます。

「核エネルギーには、核兵器と原子力発電という二つの側面がある。核兵器を開拓したオッペンハイマーは、「物理学者は罪を知ってしまった。しかも、それはもはや失うことができない知識である」と弁明した（1947 年）。朝永振一郎はこれに同情しつつ、「核の原罪」免れる、たとえば地球物理学などに科学の将来の姿を描いた。

ヒロシマ・ナガサキのあと、「平和のための原子力」の旗の下に原子力発電が始まった。政治家がイニシアチブをとり、科学者や技術者がこぞって参加した。しかし、彼らはあまりに楽観的で、冷静な科学的・技術的検討をしなかった。三宅泰雄に「放射性廃棄物と軍事利用の危険性」が「二つの厄介もの」だとの指摘がある（1970 年）。今日、その二つの厄介もの」のレベルをはるかに超えて、途方もなく困難な問題であることが明らかになった。」

実際に、相当長い間「原子力ブーム」は続きました。

「ウランの核分裂とプルトニウムの創成」という図をご覧ください。これは第二次大戦中マンハッタン計画で行なわれていた秘密研究です。ウラン235に中性子を1個ぶつけると、それを吸ったウラン235は不安定になって、2つに分裂します。3つに分かれることもあります。たとえばストロンチウムやキセノンという「死の灰」に分かれ、そのときエネルギーと中性子を2



ウランの核分裂とプルトニウムの創成

~3個出します。その中性子がウラン238という核分裂しない同位元素に当たると、それを吸ってウラン239になり、それがネプツニウム239になり、やがてプルトニウム239になるということです。プルトニウムは自然界になかった物質ですが、米軍がマンハッタン計画の中で作り出していくわけです。1945年広島に落とされたのがウラン235の原子爆弾で、長崎に落とされたのがプルトニウム239の原子爆弾でした。

死の灰など放射性物質は相当に長い間、放射線を出し続けながら減っていきます。半減期というものですが、1半減期は放射能が半分になる期間です。最初の半減期で100%のものが50%に減ります。以降1半減期ごとに半分、半分、半分と減っていきます。

原子力で発電をすると死の灰と半減期の非常に長い放射性物質が同時にできるということを、原子力発電の旗を振った研究者たちはあまり重要と考えていませんでした。

伏見康治さんという人がいました。大阪大学や名古屋大学で教えておられた有名な物理学者です。彼は東大の茅誠司さんとともに中曽根さんに原子力研究をすべきという、いわゆる「茅・伏見提案」をされた方です。1984年のことですが、エントロピー学会の総会で私の質問に応じて伏見康治さんは、「原子力を始めたときは、原子力の後始末のことは考えていなかった」と述懐しています。

日本では1955年に原子力基本法が制定されました。「原子力の研究、開発及び利用を推進すること」というのが目的(第1条)です。基本方針(第2条)は「平和の目的に限る」というんですね。そして原子力委員会と原子力安全委員会というのをづくり、特に安全問題を扱う原子力安全・保安院という組織を経済産業省のもとに設置しました。原子力委員会と原子力安全委員会は内閣府に属しています。経済産業省は原子力を推進する省ですから、それが一方で安全・保安を議論するというのは難しいことです。自転車のペダルを踏みながらブレーキをかけるという、そういう矛盾に対する指摘はずいぶん前からありました。鳩山首相は、原子力安全・保安院は経済産業省から分離しようとしていましたが、任期途中で辞めてしまいました。しかし、彼が辞めても、流れとしては、近い将来、原子力安全・保安院は経済産業省から分離されることになると思います。

中曽根さんの時代にはじまった原子力発電は、いま菅内閣の下で、世界に官民あげて売

っていこうとなっているのが実情です。しかし、歴史を振り返り今後のことを考えると、そうはいかないと思います。その理由を以下に述べます。

ひとつは被曝労働者の存在を抜きに原子力発電を運用することはできないということですが、しかし、大学を出たエリート的な立場の人はそういうところでは働きません。工業専門学校を出たとか、季節労働者で今回はあそこの原発で働いてもらうという下層労働者が被曝することになります。電力会社の社員は被曝労働者にはなりません。こういう差別された被曝労働者なしには成り立たないという原子力発電は、間違っていると思います。

平和利用の原子力かということですが、これも常に「核拡散」という問題がつきまっています。

核燃料サイクルは可能かという問題でも、使用済み燃料の中からプルトニウムや残っているウランを取り出してもう一度使おうということで青森県の六ヶ所村に再処理工場を建設しましたが、最後の試験運転をしようという状態になってから、すでに4年経っています。ガラス固化体がうまくつくることができず、また止まっています。たぶん今後もうまくいかないと思います。

制御可能性ということですが、新潟の柏崎刈羽や福島原発で大量のデータ捏造・隠蔽が発生しました。東京電力の上層部も責任を取ってやめました。巨大な技術で、技術者や担当者がすべてを目配りするには、やはり無理があると思います。担当者の判断で隠さざるを得ないところが出てきてしまう。いま、島根原発で510箇所の指摘が出されて問題になっていますが、やはり制御可能性は低いと言わざるを得ません。

エネルギー源として持続可能なものではない。ウランは有限な資源ですし、サイクルと言ってもいま考えられているのは1回限りです。

そして本当に安価かという問題ですが、大島堅一さんの『再生可能エネルギーの政治経済学』という出版されたばかりの本に電源ごとの総単価というのが示されています。非常に克明な計算をされたものです。これによりますと、1kWh当たり原子力は10.68円、火力は9.9円、一般水力は3.98円、揚水発電は53.14円、原子力と揚水発電はセットですので

		原子力	火力	水力	一般水力	揚水	原子力+揚水
1970年代	発電単価	8.85	7.11	3.56	2.72	40.83	11.55
	開発単価	4.19	0.00	0.00	0.00	0.00	4.31
	立地単価	0.53	0.03	0.02	0.01	0.36	0.54
	総単価	13.57	7.14	3.58	2.74	41.20	16.40
1980年代	発電単価	10.98	13.67	7.80	4.42	81.57	12.90
	開発単価	2.26	0.02	0.14	0.08	1.52	2.31
	立地単価	0.37	0.06	0.04	0.03	0.35	0.38
	総単価	13.61	13.76	7.99	4.53	83.44	15.60
1990年代	発電単価	8.61	9.39	9.32	4.77	50.02	10.07
	開発単価	1.49	0.02	0.22	0.11	1.16	1.54
	立地単価	0.38	0.10	0.08	0.06	0.29	0.39
	総単価	10.48	9.51	9.61	4.93	51.47	12.01
2000年代	発電単価	7.29	8.90	7.31	3.47	41.81	8.44
	開発単価	1.18	0.01	0.10	0.05	0.60	1.21
	立地単価	0.46	0.11	0.10	0.07	0.38	0.47
	総単価	8.93	9.02	7.52	3.59	42.79	10.11
1970～2007年度	発電単価	8.64	9.80	7.08	3.88	51.87	10.13
	開発単価	1.64	0.02	0.12	0.06	0.94	1.68
	立地単価	0.41	0.08	0.06	0.04	0.34	0.42
	総単価	10.68	9.90	7.26	3.98	53.14	12.23

これを合わせると 12.23 円となります。原子力はけっして安価なエネルギーとはいえません。ずっと言われてきた原子力発電は安いという話は、嘘だということがはっきりしてきたということです。

というわけで、「平和のための安価な原子力」ということは、徹底的に検証すべき時代にさしかかってきたと私は思います。

最後に、原子力資料情報室の核燃料サイクル政策の転換についての提言についてご紹介します。

1 つ目が「原子力政策大綱」の改定、2 つ目が核燃料サイクル政策の放棄、3 つ目が放射性廃棄物の埋設から管理へ、4 つ目が原子力発電の道筋、5 つ目が安全規制機関の独立、6 つ目が情報公開・住民参加の保障となっています。

これは、近々緑風出版から『破綻したプルトニウム利用—政策転換への提言』という本として出版される予定ですので、ぜひ手にとって読んでいただければと思います。

以上、「われわれはなぜ脱原発をめざすのか」についてお話させていただきました。きょうのお話は私の個人的な経験と見解が入っていますが、原子力資料情報室の他のメンバーも脱原発ということで、おおむね同じ考えをもっていると思います。

#### 核燃料サイクル政策の転換を提言する

原子力資料情報室／原水爆禁止日本国民会議

私たちは次のように政策を転換するよう提言する（各項目の説明文は一部略しました）。

##### ○「原子力政策大綱」の改定

転換の第一歩として、「原子力政策大綱」を見直すことが必要である。原子力問題についてさまざまな見方が公平に反映される人選で策定会議を設け、現行「政策大綱」を根本から見直すべきである。

その際、合理的な手法を採用し、総合的な政策評価を実施することが求められる。

##### ○核燃料サイクル政策の放棄

東海再処理工場、六ヶ所再処理工場は、ともに廃止されるべきである。

高速増殖実験炉「常陽」、原型炉「もんじゅ」も、廃止されるべきである。ウラン濃縮工場等も廃止されるべきである。

これら施設に保管されている使用済み燃料、プルトニウム、ウラン、放射性廃棄物については、旧政権下で行われてきた政策の誤りについて真摯に謝罪した上で立地地域住民の合意を得て、当面は各原子力施設で適切な管理・貯蔵が継続されることが必要である。

高速増殖炉の実用化計画、第二再処理工場計画は、放棄されるべきである。プルサーマル計画は中止されるべきである。

##### ○放射性廃棄物は埋設から管理へ

放射性廃棄物は、いったん埋設してしまうと、問題が生じてから回収しようとしても困難であり、あえて実施するには大量被爆を必然とし、危険が大きく、多額の費用がかかる。当面は、管理をつづける政策に変更すべきである。

使用済み燃料、プルトニウム、ウラン、放射性廃棄物の最終処分については、将来世代による処分方法の選定の可能性等も考慮しつつ、研究開発を進めていくべきである。

放射能を野放しにする「クリアランス制度」は、廃止されなくてはならない。

金で釣って安全だとだまして最後は処分場にしてしまうやり方で解決することは、決してできない。高レベル放射性廃棄物とどのように向き合うかの大きな議論のなかで時間をかけて管理する場所を決めていくべきである。

#### ○原子力発電廃止の道筋

原子力発電から脱していく具体的な道筋についての検討を早急に開始すべきである。エネルギー需給はもとより、日本全体、そして立地地域の経済への影響、雇用対社会的影響をも考慮し、社会的弱者に負担を強くない形での道筋をつける必要がある。

地震災害と放射能災害が複合する「原発震災」の危険が特に大きい原発については、即時停止することが求められる。安易な寿命延長を認めず、事業の許可年限を法に定めるべきである。

#### ○安全規制機関の独立

現在の原子力安全委員会は「原子力の研究、開発および利用を推進する」目的に定めた原子力基本法に基づいて設立されている。欧米各国のように「危険の防護」を原子力基本法の目的のひとつに明記し、それをもとに規制機関を位置づけるべきである。

経済産業省のもとで推進行政の風下に立たされている原子力安全・保安院（経済産業省の「外局」である資源エネルギー庁に属する「特別の機関」）の分離独立が必要である。

同院と安全委員会のダブルチェック体制は、規制の実効性が発揮できるよう再考されるべきである。

#### ○情報公開・住民参加の保障

情報公開をさらに徹底し、核セキュリティ上特段の配慮を要するもの以外はいっさいの情報の秘匿を認めないしくみとすべきである。

（原子力資料情報室／原水禁編著『破綻したプルトニウム利用—政策転換への提言』緑風出版近刊より）

（この記録は、事務局が作成し、山口氏にご加筆・ご修正いただいたものです。）